

建築論；その問いの構造

藤原 学 京都大学大学院 人間・環境学研究科

序

周知のように、森田慶一「建築論一般について」では建築論は大きく三つに区分されている。曰く、建築批評、建築論各論、全一的建築論の三つであり、われわれが、つまりはこの雑誌に関わり、この特集に興味を示す読者が関心を持つのは、いうまでもなく最後の全一的建築論である。建築批評や建築論各論が、個別的で「その総和が建築そのものを全一的に理解させるとは限らない」のに対し、全一的建築論とは「建築の本質に、その全一性^①の見地から直接に迫ろうとするものである」。しかし「これにはいつも方法論上の厄介な問題が付きまとう^①」。それゆえ、森田の権威ではなく、問いを引き継ごうとすれば「建築論とは何か」ではなく、「建築論は如何に問うるか」と問わねばならない。「全一性^①の見地から直接に」建築の本質に迫ること。これこそが建築論の変わらぬ主題であり、実践することが困難な課題だからである。

① 森田慶一「建築論一般について」、『建築雑誌』1972年7月号、711～712頁

1. 建築への問い

建築論の主題は、建築そのものである。われわれが問うのは建築そのものである。このとき、建築は未知のものとして立ち現れる。それまでは、Aという建築家について、Bという様式について、Cという構法についてなど、いかにも専門家の顔をして滔々と話していたのに、「建築論」を専門とするやいなや、途端に自らの言葉があやしくなる。私は建築についていったい何を知っているのだろうか、自問自答しなければならなくなる。建築論の問いは、この状況を自覚することから始まる。

無知を悟ったならば、次に何をすればよいのか？ さしあたり書架を眺め、古典の書を繙いてみる。「建築家の知識は多くの学問と種々の教養によって具備され、[略]願わくば、建築家は文章の学を解し、描画に熟達し、幾何学に精通し、多くの歴史を知り、努めて哲学者に聞き、音楽を理解し、医術に無知でなく、法律家の所論を知り、星学あるいは天空理論の知識をもちたいものである^②」と、諸学を学ぶことが要請されているが、「奇妙にも、その専門の学科である

② 森田慶一訳註『ウィトルーウィウス建築書』東海大学出版会、1979.9、2～3頁

③ 増田友也「仮題「建築とは何か」」、「増田友也著作集」V、ナカニシヤ出版、1999.3、342頁

べき建築学については何ごとも語^③」られてはいない。建築論は、建築の基礎学だともいわれるが、建築には目を向けずひたすら外に関心を延ばせばよいというのであろうか。地球環境問題、グローバル化、AIなど、現代の諸問題に無関心ではいられないが、当の建築そのものを問うことを忘れ、ひたすら up-to-date なことを、生半可な哲学用語を並べて語ることが建築論だとみなす誤解の淵源は、案外根深いのかもしれない。

それならばいっそのこと「学際性 inter-disciplinary」を先取りしているのが建築論なのだ、と嘯いてみてはどうであろう。しかしそれには、いくつかの条件が必要である。

第一に、ウィトルウィウスを錦の御旗に掲げることはできない。われわれが引き継ぐのは古典や先人の権威ではなく、問いだからである。それは建築を問う「比類なき絶好の通路となりうる^④」が、権威を保証する規範ではない。

④ 増田前掲書、343頁

また、個別的な建築論各論の「総和が建築そのものを全一的に理解させるとは限らない」ということも思い出さねばならない。加算的に個別知を寄せ集めたとしても、全一的建築論には届かない。だとすれば、諸学をどんなに寄せ集めてみても、建築論にはならないはずである。建築論としての学際性とは、いかなることを意味すればよいのであろう。

学問の専門分化を歴史的、原理的にふり返り、現在「さまざまな「学際的」な研究主題が新たに登場しつつあることは、[略] どのような個別の領域の学問・科学の中にも必ず内包されているはずの、「全体」との本質的な関係性から由来するものであり、そしてそれらの個別の disciplines がふたたび、人間の学問的営為としての全一的な知の追求へと収斂されることを、潜在的に希求していることの兆候とみなすことができるであろう^⑤」という現代の哲学者は、「すべての学問は互に内容の連絡交流をも」ち、「学問全体は、実に、一個の人体のようにその肢体から構成されている^⑥」というウィトルウィウスの言葉を首肯するであろう。この哲学者は「proto-disciplinary (原・学問性)」の必要性を説く。そして、全一的な知とは、「人間は環境としての世界の中に行き行動している。そしてできるだけよく、有効に行き行動するために、環境としての世界と自己自身のあり方を知ろうとする^⑦」ことであるとし、それは、inter-ではなく、proto-disciplinary の先に、その原点・起点として見定められている。

⑤ 藤沢令夫「学術総合の理念について——その真にリアルな根拠は何か」、「藤沢令夫著作集」第Ⅵ巻、岩波書店、2001.5、358頁

⑥ 前掲「ウィトルウィウス建築書」、7頁

⑦ 藤沢前掲書、351頁

そもそも建築 architecture の語に含まれている archē (原理) は、何についての原理かという対象は限定されていない^⑧ のだから、全一的建築論のその「建築」を対象として措定することはできない。われわれは先ず、全一的な知、つまり proto-disciplinary (原・学問性) に立ち戻り、そこから主題としての「建築」を、主題として限定するよりほかない。それこそが建築論の最初の課題であろう。そしてそれは同時に、建築論の終局的な課題でもあるはずである。ウィトルウィウスが学ぶことを要請した諸学の中に建築学が入っていないのは、あなが

⑧ 森田慶一「建築論」東海大学出版会、1978.2、161頁

ち偶然とはいえないのかもしれない。

2. 言葉への問い

私は建築についていったい何を知っているのだろうか、自問自答している。ふたたび書を繙いてみる。

「実に、すべてのものには、特に建築には、この二つすなわち意味が与えられるものと意味を与えるものが含まれている。意味が与えられるものとは、それについて語られるよう提示されている事物をいい、意味を与えるものとは、学問の理に従って展開された説明をいう。」⁹

⁹ 前掲『ウィトルウィウス建築書』、3頁

建築家には理論と制作との両面の習熟が必要だと云われるくんだりであるが、存在論的美学に倣っていえば、建築作品には「物」の層と、「事象」つまり意味の層がある、と云っているように受け取れる¹⁰。物の層と意味の層は、ウィトルウィウスにあつては、作品の外にある学問によって結びつけられる。この行為を「解釈」と呼んでみよう。物と意味に分裂した作品を、ふたたび一つにまとめあげる作業、といってもよい。すると、芸術制作からその解釈に至る過程を通して、建築論に必要な言葉の在り方が見えてくる。

¹⁰ 新田博衛「芸術作品の座標」、『実存主義』61号、以文社、1972.9、104～123頁、第1節参照。

たとえば作曲を例にする。心に曲想があつてそれが肉体を通り楽器を動かす、と思いがちだが、実情は逆だ。肉体が思い通りに動かないときに、その思いの放射源として心といったものが浮かび上がって来る。しかも芸術家は手の慣れを否定し、心を求めねばならない窮地にまで肉体を追いやる。そうすることによって心を、つまり曲想をはっきり掴むために。心を意識と呼び、手を肉体と呼び、両者が一つとなって生きて活動する機能体を身体と呼ぶ。「生きて動いている身体（キタテ）の自覚（ジカク）（引用者註、傍点原文、以下同じ）——これが芸術という営みの内容である。この営みは三つに分節して行われる。「手」、「心」、そして「身体」。営みが記号化された結果を芸術作品と呼ぶ。作品は、三つの分節に対応して、三つの層を含むことになる。「物質材料」、「主題・モチーフ」、および「解釈作用」。作品は全体として身体（キタテ）の模倣（モウ）になっている。[略]芸術作品はいつでも既に解釈作用を内包している。この層の力によって作品は今まで生きて来たし、これからも生きる。作品が生き続けるということは、しかし、われわれが作品を生かし続けるということである。どうやって？ 物質材料という「手」と、主題・モチーフという「心」に分裂した「身体」を、解釈の行為の中で統一することによって。美的経験とは、鑑賞者が“身をもって”作品を生きることなのである¹¹」

¹¹ 新田博衛「美的経験」、今道友信編『講座美学』第2巻、東京大学出版会、1984.7、83～121頁、第2節参照。

¹² 新田前掲「美的経験」、106頁

ここでいわれる「物質材料」は物の層に、「主題・モチーフ」は意味の層にたやすく置き換えられる。ただし「解釈作用」は美的経験にあつては「知覚による知覚の自覚¹²」であるが、建築論にとっては、それは、言語的でなければなら

ない。しかもそれは生きた身体同様、生きた言葉でなければならない。ウィトルウィウスに従うならば、「一個の人体のようにその肢体から構成されている」学問によって、作品を解釈することが要請されているからだ。生きた言葉とは、言葉の意味が、その物質材料である音に一体化し住み込んだような言葉のことである。このとき言葉は音楽に向かって無限接近し、詩の言葉となる¹³。もちろん、抒べ・詠われる建築論であっても構わない¹⁴。しかし詩の言葉がどれだけ音楽に近づこうとも、そこにはなお普通の意味での言葉の機能が働いている。辞書で意味を調べることができ、当該の国語の構文に則って記されている。ただそこでの言葉は、まさに言葉そのものとして、意味を住み着かせた音、つまり生の言葉であることは変わらない。それでなければ、「身をもって”作品を生きること”」はできず、「全一性¹⁵の見地から直接に」建築の本質に迫ることもできはしないからである。

¹³ 新田前掲「芸術作品の座標」、第2節参照。

¹⁴ 田中喬『小建築論 または生活・環境構成論への試み』ナカニシヤ出版、1997.3、290～291頁参照。

3. 問いへの問い——結びに代えて

私は建築についていったい何を知っているのだろうか、自問自答している。書から眼を転じて、今度は外を眺めてみる。数多の建築物が見える。それらは紛れもなく、建築技術の所産である。しかも、建築論とは無関係に存在しているように思える。建築論が無益なものに思えてくる。なぜ建築を言葉で論じなければならないのだろうか？

これまでわれわれが考察してきたのは次のことである。

建築論の主題は建築であるが、当のその建築は限定されておらず、それを限定することこそが課題である。そのためには、生きた言葉を用いて物と意味に分裂した作品を解釈する、つまり身をもって生きなければならなかった。しかしここで、われわれは当惑する。何が建築か分からないのに、言い換えれば、建築という学問領域、ジャンルが定まっていないのに、個別の建築作品を解釈のために選択しなければならないからである。われわれは、いったいどうすればよいのだろうか。

proto-disciplinary (原・学問性)に立ち戻るのが、道筋であった。そこへと戻り、対象が無い作品、というものを想定することが一つのレッスンになるように思われる。

み渡せば花ももみじもなかりけり浦の苦屋の秋の夕ぐれ 定家(新古今363)

定家の歌は、詩想と音が結びついた詩の言葉そのものである。それを問題にしようというのではない。問題とするのは、桜の花も紅葉も「無い」という否定表現である。「見渡せば」という語に従って、われわれの眼前には広い世界が

開かれる。「花ももみじも」と続くと、ただちに、桜の木や紅葉の木の色鮮やかな姿を想う。その刹那、それらが「なかりけり」と否定される。だからといって、花やかな想念が無くなるわけではない。しかしまた、それらの木々が有るのでもない。

たとえていうならば、対象を描写するかのよう語り出された言葉がその指示対象に向かおうとするが、そちらを向いた瞬間に対象が見あたらず一切の歩みを止めざるを得ない、といった状況である。しかし、対象が無いという訳では決してない。指示対象が無い言葉は嘘と呼ばれる。もちろん、この歌を嘘と言って済ますことはできない。それとは対極に位置する言葉で詠われている。花が「無い」、もみじが「無い」からこそ、それらが有る世界が切実に、リアルに感じられる。だからこそ、それらが無い世界がより一層切実に、リアルに感じられ、歌に詠まれる。存在に憧れる非在、非在に凌駕される存在、そんな世界が言葉によって表現されている。いや、言葉以外にこのような世界を表現することができるだろうか。

なぜ建築を言葉で論じなければならないのか？

言葉でしか開示できない世界があるから。建築論の意義に関わる問いへのわれわれの回答は、これである。

しかし、われわれはふたたび当惑する。具体的対象を、すなわち質料性を欠いた世界を解釈しても、手と心の美しい結合は望めないからである。だが、この回答は既に用意されている。

作曲家は曲想をはっきり掴むために、手の慣れを否定して心を求めねばならない窮地にまでみずからを追いやっていた。われわれはそれと逆のことをしているに過ぎない。手垢のついた言葉を捨て去り、肉体を、こう言ってよければ、存在を、求めねばならない窮地にまでみずからを追いやしているのだと。何のために？ 窮する度合いが強ければ強いほど、存在も密度を増すから。心と手、最後に辿り着いた言い方で言えば、言葉と存在の両者が一体となる時、建築家が生まれる。その能力を高めようとするならば、ふたたび言葉を捨て、より生き生きとした言葉を探さねばならない。それゆえ、建築論の問いが閉じられることはない。問いを引き継ぎ、その問いを問い、導き出された更なる問いを問う。この歩みこそが、言葉本来の意味で建築論の方法 (meta-hodos) なのである。